

# 基調講演「人と人がつながるコミュニティデザイン」

開催年月日：平成24年8月29日（水）11：00～11：50

場所：星野リゾート青森屋（青森県三沢市）

講師：山崎 亮氏（studio-L 代表、京都造形芸術大学教授）

改めまして山崎です。どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございます。

今、御紹介をいただいたとおり、大阪で studio-L という事務所をやりながら京都の芸術大学で教員をさせてもらっています。

大体 45 分くらいお時間をいただいているということなんですけれども、2 時間ぐらいのパワーポイントを持って来ちゃったんですよ。ちょっと多すぎるなと思いながら、だけど、最初に御挨拶をいただいた三村知事、かなりテンポ良くお話をいただきましたから、僕の方もテンポ良く話をしても、聞き取れなかったぞという話にはならないのかなというふうにも思います。

我々が普段仕事をしている中山間、離島地域の集落に行くと、やっぱり「もうちょっとゆっくりしゃべってくれ」とよく言われるんですね。一番集会に出てきて若い人が 74 歳とか、そういうところですから、「聞き取れなかった」ということですが、そう考えると今日会場にお集まりの皆さんは、皆さん総じてお若い方ばかりですので、少々テンポ良くお話をしても大丈夫かな、許していただけるかなと思っております。

簡単に自己紹介です。コミュニティデザイン、ちょっと聞き慣れない言葉ですが、広い意味で言えば「まちづくり」と捉えていただいて良いかもしれません。細かい文字は無視していただいて、大きくはうちの事務所でやっている 4 つの島があると思っておいていただければと思います。

1 つはランドスケープデザインと書いてありますけれども、公園や庭、それからこういう建物も含めて設計するというのが元々、僕の仕事でした。だから、今日、お庭を見せていただいて、あれだけ大きな池であったり、中の配置、ああいうのはまさにランドスケープデザイナーの魂を揺さぶるようなものですが、ただ、星野リゾートさんがここに入られて、その中のマネジメントをされてからここが変わると同じく、実は公園をただ作っただけでは、もう 5 年も経たないうちに皆、全然使わないぞという場所になってしまう危険性もある。

1 個右側にパークマネジメントと書いてありますが、これ、聞き慣れない言葉です。公園を運営していくと。美術館、博物館にも館長がいるのに、公園に園長がないのはどういうことだということで、公園にしっかりとしたマネジメントを作って、ハードを作って滑り台とか何かを作っただけで人が未来永劫来ると思うのはもう止めましょうと。人口も減っていくんだし、これからはやっぱりそこをどういうふうに住民が使いこなしていくのかというのを考えないとダメじゃないかということで、このパークマネジメントということをやりました。

兵庫県立の有馬富士公園からスタートしまして、京都府立や大阪府営のいくつかの公園で、ものの設計はもうやらなくなったんですけれども、その中のマネジメントをどうするかということをやっています。

従って、星野リゾートさんの星野さんとは、まだ実はお会いしたことはないのですが、いつもニアミ

スで、テレビの番組でも前後で一緒になったりとかということで、すごく尊敬する一人ではあります。

こういうふうなマネジメントのいかんによってその空間のあり方が全然変わってくるということがありますので、こういうパークマネジメント、公園もちゃんと運営しなければダメよねということを今、やっております。

これが幸いなことに地域の方に盛り立てていただいて、かなりうまくいった事例が出て来ると、「何で公園の中だけでやっているんだ」と、「これ、町全体でやったら町が元気になるんじゃない？」と言われるようになりまして、まちづくりという仕事をさせていただくようになっております。

さらにまちづくりで住民の方々、100人、200人と一緒に町のことを考えていると、その人達と一緒に総合計画を考えたかどうかと、「シンクタンクや行政の人達だけではなくて住民の人達と一緒に総合計画づくりってやったらどう？」という話をいただくようになりまして、今はこの4つの種類をやっているということですね。パークマネジメントに入れていかどうか分からないのですが、鹿児島島の百貨店のマルヤガーデンズという百貨店、ここをコミュニティデザインの形で再生していくということにも携わらせていただきまして、先ほどお聞きすると、三村知事の同期の方ですね、とても美しい女性なんですけれども、玉川恵さんという方が社長をされていて、その方が社長をされている大きなデパートの中にコミュニティの活動を入れていくと。単にテナントを入れてお店だけではなくて、コミュニティがそこで活動することによって普段デパートに来なかった人達がそこへ来て、帰りに少し買い物をして帰るという人の流れを作っていくことができるんじゃないか、こんなことにも携わっております。

ただ、これを全部お話するというわけにはいきませんので、今日は島根県の隠岐郡海士町というところ、後で紹介をしますが海に武士の土と書く海士町というところでお手伝いをしている仕事についてお話をしようと思います。

その他、研究と教育というものに携わっておりまして、研究の中では兵庫県の研究所で何年間か中山間、離島地域の研究をしていたことがありますので、その話を今日はちょっとだけ、最初何分かさせていただいて海士町の話にいきましょうかと思っております。

人口減少、もう最初に司会の方からもお話がありましたけれども、御承知のとおりだと思います。これから人口が減っていくということですね。

下は大阪府です。我々、今、大阪で設計事務所をやっていますので大阪府でやりましたけれども、市街地が大きくなってきた時代から、必ずしもこれは折り返しとは言えませんが、人口規模が同じくらいになっていく時代を考えると、少なくとも都市域の開発圧というのはこれ以上大きくはなっていないということですから、これからどうなっていくのかということですね。空き地や空き家、どんどん増えていくだろうと言われております。

全国的に見ても、この表現が適切かどうか分かりませんが、北海道、北東北というのは人口減少先進地だと思っておりますね。非常に、この言い方が適切かどうか分かりませんが、僕は優秀な地域だと思っておりますね。先進地の地域だと思っております。この5年間で人口がかなり減ったところというのが赤で、若干減りましたというところが黄緑なんですけれども。こういう大都市を抱えているような場所というのは白ですね。この白いところというのは人口が減っていないか、あるいは増えている都道府県です。若干減ったところが黄緑でかなり減ったところが赤だということ言えば、北海道と北東北というのはもうきっちりと人口を着々と減らしていっていると言えますので、20世紀、人口が増えなければ何もできないと思っていた時代には、「まいったな、課題だな」となるのですが、これからもう全国人口が減っていくという意味では、一早く人口を減らしている。だから、多分、新しい時代のモデルはこの地域から出て来るだろうと思われるような地域ですね。

ちなみに我々が活動をしている大阪府も優秀です。大阪府は大都市を抱えているにも関わらず、もはや人口を減らし始めているということですから、相当優秀な府だと思いますね。これからもここで活動をしていきたいなと思います。

なぜか。これは皆さん、御承知のとおりですね。10年経つとほぼほぼ赤ですね。この頃になって黄緑色になったところが焦り始めるわけですね。「まずい、小学校が統廃合になった。これ、どう取り扱えばいいんだ」。でも、そんなことは北海道や北東北だったらもう20年前から取り組んでいるぜという話になると思いますね。こういうところからきっちりモデルが出てくるかどうかです。

さらに2030年になれば、もう全国的に赤ですから、一早く赤になっているところはどういうことに取り組んでいたのかということがしっかりと示すことができれば、人口減少先進国である日本の全体に何かヒントを与えていくきっかけになるのではないかなと思います。

御承知のとおり、ヨーロッパの一部を除いては、まだ皆、人口が増加していますので、これから人口減少局面に入りますね。中国は2016年、韓国が2019年から人口減少になりますので、日本が今の段階からどういうモデルを、人口減少先進国としてモデルを示すことができるかは大切だと思います。

ただ、人口減少、それは良いことだと言うのもなかなか難しいんじゃないか。ただ、頭をグッと切り換えてもらおうと、いつも上のグラフを見せられるんですが、実は国勢調査が始まっているのがこの辺りからだからしょうがないのですが、ところがこれをグッと引き延ばして見ると、実は日本の人口というのは長い間、1千万人から3千万人までの間だったのではないかと。そして、これから先、また千年単位で見た時に、もう1回この山が来ると思えるかという、多分そうはならないだろうと思うんですね。下は単なる空想です。が、これを小さくしてみたら、西暦1000年から3000年くらいまで人口統計がありませんが、多分横ばいだったと思うんですね。なだらかに横ばいで、ちょっと上がるぐらい。この100年で一気に増えて、100年で一気に減ったと。

ある種、僕らはすごく特徴的な、特殊な時代を生きていたというふうに言えるんじゃないかと思うんですね。1千万人から3千万人が実は日本の人口としては適正規模だったと言えるかもしれません。これは環境容量と言われますけれども、この国土面積で、この地形で何人の人が無理なく過ごせるのかということ考えた時に、実は3千万人から3千5百万人じゃないかという試算はいろんなところから出ています。だから、むしろ、無理なくこれからちゃんとダイエットしていくことにした方がうまいんじゃないかと。日本の国土に降った雨から手に入る水だけで生きているのは3千5百万人ですね。今、バーチャルウォーターとか、海外から水をいっぱい輸入している。野菜、肉、輸入していますね。土壌の回復力だけで、つまり有機、オーガニックな野菜だけで僕らは生きていこうと思えば、自然な形で生きていこうと思えばこの人数です。バイオマスエネルギーだけでと言えば3千万人。日本が鎖国をしていた時代ですね。このあたりの時代の時の人口というのが、実はこの国の適正な人口規模なんじゃないかと言われていました。

そうだとすると、ある特殊な1億人くらい多く生きてきた時代にいろんな力を借りなくてはいけません。エネルギーにしたって、あるいは食べ物にしたって、いろんなところからある種、取ってこないといけないわけですが、人口がこれから9千万人、5千万人に減っていくと、100年掛けて5千万人に減っていくという時代を、いかに美しく人口を減らしていくかということも非常に大切なビジョンになってくるのではないかなと思います。

これは各都道府県にとってもそうですし、それを適正な人口規模に戻していくことを一早く示すことというのも未来の世代に対してやらなくてはいけないことだと思います。ただ、それがうまくいっていないから、わりと限界集落なんていう言葉が出てきちゃったりしますね。こういうことを言っていたり、

あるいは全国の集落で困っていることというのが沢山出てきています。これは小さくて恐縮ですが、耕作放棄地が増えています、森林が荒れています、病虫害・獣害が増えています、ゴミの不法投棄、空き家、あるいはお祭りが成り立たない、地域コミュニティが成り立たないというようなことになってきていますね。

このあたりをどういうふう乗り越えていくかというのが今回のテーマである地域コミュニティ、どういうふう再生して地域を活性していくかということだと捉えております。

すいません、お手元の資料にないもの、先ほどちょっと足しちゃったんですけども、ここから資料に基づいてお話をしていこうと思います。

海士町、御存知かもしれません、海に武士の士と書いて、これで「あま」と読むんですね。海士町というところ。島根県の離島です。場所はこんな場所ですね。ゲゲゲの鬼太郎で有名になった境港から、さらに4時間船で北上しなければならないところなんです、人口は2,300人。1ターンとUターンとずっと地元に住んでいるネイティブの人ですね、この3者の人達から構成されている島です。外から入ってきた人が300人くらいいるというところですから、2,300人のうち300人は外部から来た人だと言われています。

こんなところで町長から呼ばれて、「総合計画をつくりたいんだけど、シンクタンクと行政の職員だけでつくるのはもう止めたんだ。住民の方々と一緒につくりたい」というお話をいただきましたので、それは良いことだということで、「じゃあ、是非御一緒させて下さい」ということでお手伝いすることになりました。大体80人くらいの住民の人達が集まってくれました。「総合計画をつくるのでアイデアを出して下さい」ということで、ワークショップをやりますということで集まっていた人達と一緒に、強みと弱みと、そしてどんなことを大切にしたいかということとを皆と一緒に話し合っていて、これはよくあるワークショップですね。KJ法とかブレインストーミングとか使いながら分けていきました。

皆さん、集まってくれた方々がどんなことに興味を持っているのかということ毎に4つのチームをつくりました。人に関する事、暮らしに関する事、産業に関する事、環境に関する事でテーブルに分かれていただいて、大体20人ずつぐらいのチームが4つできたんですね。我々、コミュニティデザインをやる時はチームビルディングとかリーダーズインテグレーションとか、いくつか方法があります。こういう方法を使って、そこで一緒にテーブルになった人達がすごくいいチームになるような、いくつかのやり取り、ゲームをしていったりしますね。こういうことをやりながら、オフィシャルには8回、非公式にはこの間に5回ずつぐらい集まっていますから全体で40回ぐらい皆さん集まりながら、海士町のこれからはどうしていったらいいのか、そして自分達はどのようなアクションを起こしていくのか、どうしてもできないところを行政の人に何をやってもらうかというような話し合いをしました。

意見を出して行政に「あれをやって下さい、これをやって下さい」という要望陳情型はもうダメですよという話はこちらからさせてもらっています。提案型で、「自分達がこれをやるので、どうしてもできない部分は行政の方と一緒にやりたいんだけど」というような話の仕方にして下さいというお話をさせてもらって、皆さんにワークショップのやり方を学んでいただいて、我々がもう現地に行っていない時でも本人達だけでそのワークショップ、話し合いが進められるようにということで、各チームの話し合いを進めてもらいました。だから、もう御飯を食べながらやったりとか、誰かの家でやったりというようなこともやっています。さらには海士町の宿泊施設の中に、二泊三日で泊まり込んで合宿をしながら提案の中身を考えていくというようなこともやりました。

2,300人の島の中で100人弱の人達が話し合った内容です。だから、提案が出来上がってきた頃には

町民の人達、皆にこれをプレゼンテーションしようということで発表会をやりました。300人くらいの人に来てくれましたね。議員の方にも来てもらって、その人達に対してこの4チームが、自分達はこんなことを考えているんですということを発表してもらいました。何か演劇みたいにやって発表をすることも出てきましたね。あとは策定委員会とか議会とか、経なければならぬ手順がありますので、そういうところを経て、それで総合計画をつくりました。

特徴的なのは2冊あるということですね。これは頼まれもしないんですけれども、右側の別冊というのを作ったんです。こっちが住民の人達がやりますというふうに宣言した24のまちづくりプロジェクトがまとめられたものです。左側がよくある行政計画ですね。これも島の幸福論というタイトルにしましたので、ちょっと特徴的ですけども、島の幸福論というのが本編です。

本編の方を簡単に説明しますと、まず島の幸福っていうのは都市部の幸福と前提が違うだろうというところからスタートしているんですね。右側が都市部です。教育や学力がやたら高いぞと、所得も高いんじゃないか、これは海士町の人達が見た都市の人達の指標ですね。なぜかという、多分、たくさん所得を得て広い家に住みたかったり、ちょっとでも自然が豊かなところに住みたかったり、安全・安心なコミュニティに住みたいと思っているから一生懸命勉強して、いい会社に入ってお金を貯めようとしているんじゃないかと。ただ、東京や大阪の人達って広い家にあまり住めていないんじゃないかと、自然環境はそんなに豊かじゃないんじゃないかと、あまり安全でもなさそうだなということで、実はその人達が目的にしている部分があまり達成できていないんじゃないかというのが海士町にいる人達が見た東京、大阪の指標ですね。

一方、海士町の人達は、自分達はもう広い家は手に入れているんじゃないかと、自然も腐るほどあるんじゃないかと、一部腐っていますね、もう自然がね、管理ができてないです、手入れができてないという状態になっていますね。安全で安心な社会、ありますね。「もう車のキーは抜くな」と怒られますけれども。「何かあった時、誰が運転すると思っているんや」という感じですね。車を盗んだって島の中ですから次のフェリーが出るまでは絶対いなければいけないですからね。安全です。そういうのをもう手に入れている人達だったら、何をしなければいけないのか、この上に総合計画の各種事業を組み立てていくというやり方にしています。

だから、東京や大阪に追いつき追い越せではないというのはもう確実だという時代を生きていますから、我々が何を大切に、何を重要視して生きていきたいと思うのかということ的前提に、その幸福論からひとチーム、産業チーム、暮らしチーム、環境チームがそれぞれ理念を出してきて、それに対して施策の大綱を組んでいくというようなやり方をします。

ところが、このままだと行政から見れば何課がどれを応援すればいいのかよく見えないということで、この次のページで課毎にこれを組み替えます。だから、住民が出してきたものをベースに組み立てた施策の大綱を、教育委員会は何を担当するか、産業振興課は何を担当するかと、担当部署ごとに分けていきます。だから色は入れ替わりますね。さっきの色がちょっと入れ替わって、どこがどれを担当するという事になっています。

一番右側に、ちょっと見にくくてすいません、別冊って本を開いた形のアイコンがあるんです。ページ数が横に載っています。住民と協働する事業が入っているところはここにページ数が載っていると、行政単独でやるやつは白いですね、白になっています。だから、このページ数を見ると、より詳しい事業の内容が書かれているということです。それが別冊ですね。こっちの別冊の方は、何か絵本みたいになっています。中学生ぐらいが読んでも分かるようなものということで、住民の方々が提案してくれた24の提案を、「大体これ、何人ぐらい集まったらできる提案ですか」と、一個一個住民に聞いていって、

「そんなものだったら1人でできるやないか」と言われたら、「はい、1人のところに入れましょう」と。「はい、次の2番目の提案、これは何人ぐらいですか」「それは100人くらいおらな無理やな」と言われたら、「じゃあ、はい、100人の方に入れましょう」ということで、目次は極めて単純です。1人でできること、10人でできること、100人でできること、1,000人でできることですね。人口は2,300人ですからこれぐらいのところということです。

だから、皆さんの都道府県、あるいは市町村の中でいえば、例えば小学校区単位でこういう計画を作った場合と思っていただくといいかもしれません。あるいは町村レベルでいえば、ひよっとしたらこれぐらいの町村の方もいらっしゃるかもしれませんが、こういう計画をそれぞれ立てていったということですね。

理念としてはプライベートとパブリックと2つに分かれた概念ではないということを知らせたいんですね。プライベートとパブリックの間にはコモンという狭領域があって、この狭のコモン領域はスケールラブルなんですね。グラデーションのように2人、3人、4人から1,000人まで、実はつながっているものですから、あなたのプライベートな生活とパブリックな生活はちゃんとつながっていなければおかしいことになりますよというようなことを、プライベートだとかパブリックとかコモンとかいう横文字を使ってしゃべったって、島の漁師さん達は「何ちゃ、よう分からん」と言うわけですね。だから、もうプライベートとかパブリックとか、そんなことはどうでもいいと。「1人でできることは、もう1人から、明日から始めて下さい。10人でできるまちづくりだったら、もう10人で寄り合いを作ってやって下さいな」というのがここでの考え方です。

見開きで1つのプロジェクトが紹介してありますね。何人でできるかというところと、イラストが描いてあってバックデータがあるという構成です。これに基づいて単に計画を作っただけじゃなくて動き出しました。当然ですね、チームビルディングをやっていますし、提案型で発言をして、「言ったからにはちゃんとやって下さいよ」というふうにひとつひとつのチームに言っていますので、炭焼きクラブを産業チームが始めています。

産業チームは、もう2年目になりますけれども、かなり炭を焼くのがうまくなってきているということですね。

暮らしチームはお誘いやさんというのをやっていますね。とにかく誘いに行くんですね。島の人達はちょっと恥ずかしがり屋のところがありますので、「今度こんなイベントをやります」と告知しておいても出てきてくれないですね。お誘いやさんは、とにかく「クリスマス会をやります」「餅つきやります」「花見をやります」という度に、例えば高齢者世帯をドンドン叩いて、「今日、やりましょう、出てきましょう」と言って誘いに行くということをやっています。

環境チームは水を調査し始めました。離島ですから周りは全部塩水です。「何でここに真水が湧いているんだ。これは何年ぐらい飲めるんだ」ということを、大学と共同しながら今、調査をしているところですね。なかなかいい水が出ているということが分かりました。名水百選に選ばれましたね。名水百選に選ばれると名水サミットというのが持ち回りで廻ってくるんですね、日本全国。2009年に海士町に名水サミットが廻ってきました。名水サミット、海士町は連絡を受けて「どうしよう」と。やっぱりイベント業者さんに頼んだ方が良くかなと思っていたら、環境チームが「大丈夫、私達が名水サミットをやります」と言って、こういうのを全部作ってくれたんですね。水の専門家とか、結構偉い先生なんですけれども、ダイレクトに住民が電話して、インターネットで電話番号を調べて、「もしもし」、早稲田大学の何とか教授みたいな人に、「私、海士町の住民ですけども」と言ってダイレクトに電話をして、「サミットに来てくれませんか」と直談判してみたり。そういう誘いってちょっと珍しいので皆、来て

くれましたね。僕も総合計画に関わっていたので、司会進行役ということでサミットに寄せてもらいました。こういうのを町民の力で成功させちゃうんですね。全国から名水好きの人達が集まってくるということをやっています。

我々、よく忘れられるんですけども、元々デザイナーです。だから「デザインに関することがあれば僕らに相談をして下さいね」というのは、もう住民の人達と一緒にやっていると常々言っていることなんです。ところが、ようしゃべるからか、忘れられるんですよ、僕らがデザイナーだったということ。会場に行くと住民の人達がこういう横一文字、こういうのを作って「どうです、山崎さん、こんなのを僕ら作ったんです、いいでしょう」とかって、すぐ自慢してくるんですね。悪くはないですけどもね、これね。悪くはないけど、デザインの的に言うとこれは絶対やってはいけないことなんです。行書体と言われているこの書体をイタリックって、こう斜めにするというのはグラフィックデザインの世界では御法度ですね、絶対ダメなこと。だから、「これ、いいけど、こういうのをやる時僕らに相談してっていつも言っているでしょう？」と言うと、「あっ、山崎さんって、そういえばデザイナーでしたね。忘れてました」みたいな感じになるんですね。「覚えておいて下さい、デザインに関わることがあったら僕らに相談して下さい。いいですね、お願いします」。そう言う、「分かりました」とか言うんですけど、まあ忘れてますね、住民の人はね。2〜3ヶ月経ってまた海士町に行くと、皆、環境チームとか書いたTシャツとかを作っているんですね。「それがダサイから。そういうのを相談しなさい」と言うんですけど、「あっ、忘れてました。デザイナーでしたね」みたいな話にどうしてもなっちゃいます。まあ、いいでしょう。でも住民の人達がこういうことを主体的にやろうと思っているこの気持ちは、僕はすごく嬉しいなと思いますね。

ひとチーム。最後ですね、ひとチームは海士人宿というのを始めました。皆が常々集まれる場所を作っておきたい。そこで住民ができる範囲で小さなイベントを行って行って、それをネタにして集落の年寄り衆とか若手とかが皆で集まっているんな話ができる場をつくりたいねということで、幼稚園が廃園になっているんですけども、その閉まってしまった幼稚園の中を改装して人が集まれる場所をつくりました。ちなみに、このおぼけみたいなやつ、風船みたいなのはしゃもじです。海士町はキンニャモニャ踊りというしゃもじを握ってカンカン叩きながら踊る踊りが有名ですので、これをイラスト化するのが良いだろうと。ゆるキャラは止めておこうという話になりました。これ、全部顔が違うんですね。だからゆるキャラにならないです。顔が違っていたらゆるキャラとして認識されませんので、これは全部提案してくれた人の顔に似せて書いてあります。だから海士町の人が見れば、大体誰か分かるということですね。

真ん中で座っているこの人は、もう皆が見て分かります、小田川さんですね。これは間違いなく小田川さんです。横の方で斜に構えて寝ているのは中村さんですね。あまり話し合いに参加したくないという態度ですね。この人は46歳、元ヤンキーですね。こういう人がまちづくりに来てくれることというのがまちづくりが楽しくなるきっかけだということをこの時、すごく思いましたね。中村さんを紹介してもらって、「まちづくりの話をしたかったので」と誘いに行った時とかは、もう最初は「絶対来ない」と言われましたね。「俺はお前みたいなのが一番嫌いなんだ。うるさい、帰れ」とずっと言われました。「素晴らしい、あなたみたいな人がいないとダメだ」と。この人、ヤンキーが来てくれるとこのヤンキーの子分がいっぱいひっついてきてくれるんですよ。「おお、中村が行くぞ」ということで、「それじゃ一緒にいこう」ということで来てくれるんですね。でも、中村さんみたいな人がワークショップ100人の中にいてくれると、まちづくりのワークショップって大体第1回目とかに演説をしたい住民の人達がいるんですよ。「はい、じゃあ始めます」とか言ったら、「ちょっと、よろしいですか」って、「そもそも

まちづくりというのはですね」としゃべり始めるんですね。そんな演説が続くと、中村さんとかが「うるせいぞ」とか言ってくれるので非常に会場が良い雰囲気になりますね。もう普通な感じになります。それはそうですよ、だって、これから楽しいことをやっていこうと思っているんだから、そもそも論はあってもいいけれど別の場所でやってもらった方がいいなと思うんですね。小田川さんなんかもそうですね、この方もまちづくりって最初に誘いに行った時は、「私は行政がやるのが一番嫌いです」と言われましたね。「素晴らしい、じゃあ、あなた来て下さい」と言って引っ張ってきたというタイプの人で、ヴィトンのバック以外、何も興味がないというタイプの人ですね。こういう人がまちづくりのワークショップに来てくれることが大事だなと思うんですね。小田川さん、写っていますね、この人ですね。

こういう小田川さんみたいな人が来てくれて、この保育所、廃園になった保育所の中を皆で意見を出し合っリノベーション、改装をしていきたいと思います。それで自分達の力で改装をしていきました。中が綺麗になって「イタリアンレストランを月に1回やります」とか、これは中村さんですね、中村さんは子分を連れて来て「俺はバーがやりたいんだ」ということで、2週間に1回ぐらいはバーをやってくれる。例えばバンドが演奏をするとか、島の人達がここで面白いことを毎回やってくれています。

ちょっと見ると若い人が集まって勝手なことをやっているだけに見えますが、これが行政の総合計画に基づく事業として位置づけられているというのが特徴的なんですね。だから、14ある集落の人達も、皆、これを応援しますということをちゃんと了解を取っていますので、島の年寄り衆もちゃんと出てきてくれるんですね。ここで割とベテランの方々と若い人達が、これをネタに集まってくる。どんな音楽をやっているかあまり分からないのですが、何でも良いわけですね。ここに来て喧々諤々、ああしたい、こうしたいという話をしたり、「あの人、最近出てきはらへんけど、大丈夫やろか。ちょっと1回誘いに行った方がええんちゃうか」みたいな話がここでできることが僕は大事なんじゃないかなという気がしています。

皆で作った計画だからこそ、単に言いつぱなしじゃなくて自分達がまず動き出しなさいというのが基本的なスタンスですね。行政の職員として、それはなかなか言えないのですが、我々は民間としてそれをお手伝いする立場ですから、行政の人がこれだけ頑張っているんだからあんたらもちゃんと動かなきゃダメよということは住民と話ができます。

そうやって、それぞれの人達が動き出しました。別冊に書いてあるページ数がありますが、もういろんなプロジェクトが動き出しているんですね。この魅力ある島前高校をつくろうというのもそうですね。島のお母さん方が高校を何とか復活させたいと。島の高校ですので、これは廃校になる危機だったんですね。高校がもう無くなるということになっていたんですけども、ここを何とか盛り立てたいと。島から本土の方に行って、ちょっと優秀な人達がいっぱいいるところに子どもを行かせたいというお母さんが出てきちゃったりするんですね。ところが、皆がそっちに行っちゃうとここの島の高校が無くなっちゃう。無くなると中学を卒業したら皆高校で島から本土に出なければいけなくなっちゃうんですね。これは経済的にも結構厳しいということで、何とか残したい。このお母さん方のコミュニティは我々がデザイナーだったということを辛うじて覚えていてくれたんですね。それで誘ってくれました。我々はこういうポスターを作ったりチラシを作ったりしました。コンセプトを「島留学」としました。「島に留学しませんか」という感覚ですね。

これを東京とか大阪とか京都とか広島とか福岡の中学校に送ったんですよ、沢山。考え方としては、例えば東京の田園調布に住んでいるようなマダムが、「うちの娘は、高校はスイスに留学させるぞます」とかいうのも悪くないですね、かっこいいです。「うちの息子は、オーストラリアの高校に行かせるんだよ」というのもかっこいいかもしれないけれど、中には「うちの息子は、海士町に留学させるんだ」



という親がいてもいいんじゃないかなと思うんですね。一応、辛うじて海外ですしね、海士町もね。日本語もそれなりに通じますから、海士町に行く。そうしたら東京や大阪とは全く違う3年間は過ごせませす。ここで人間力をものすごく高めてもらって東京にまた戻ってあげればいいんじゃないかというふうにダイレクトメールをいっぱい送ったら、すごい応募者が殺到したんですよ。願書がものすごく届いて、教育委員会は慣れてないんですね、人を落とすということ、受験で人を落とすなんてやったことないですから、「せっかく応募してくれた人を落としていいんだらうか」という緊急会議を開くわけですよ。さらに問題なのは、海士町の中学生が落ちるかもしれないということになっちゃうわけですね。これでは何をやっているか分からないということで、急遽、海士町の役場の中に公営の塾をつくりました。海士町は塾がないですからね、町営塾というのをやって、講師を呼んで来て、ここで特訓をしたんですよ、中学生が受験勉強をして。見事、海士町の中学生は全員島前高校に入ることができました。今は全国から集まった中学生達と一緒に勉強をしているということで、今、もう2年経っていますね、3年目ですけども、かなり沢山の人がこの海士町に来てくれるということになりました。

残りの時間、15分くらいということですけども、それ以外に何をしているかということですね。

実は今、お話をしたのは80人くらいの人から始まって「面白い活動をしているぞ」という噂が広がって、今は概算ですけども300人くらいの人まちづくりに関わってくれています。人口2,300人のうちの300人がまちづくりに関わっている。1割以上がまちづくりに関わっているというと、専門家が言うところによると結構割合は高いらしいです。

ただ、我々の興味としては、そっちはもういいんですね、僕らはもう3年お手伝いをして300人の人がものすごく楽しんでやっていますから、もう僕らの仕事はない、自分達でやりたいようにやってもらったらいいんです。

ただ、我々が気になるのは、2,300人のうちの300人がこんなに盛り上がっているのに、残りの2,000人は何をしているんだと、何で出て来ないんだというのが気になるわけです。

よくよく調べて見ると、集落によってはですけども、もう20年間も集落の外に出たことがないですというおばあちゃんがいたりするんですね。こういう人達、これからどうなっていくんだらうということ考えた時に、「集落ごとのケアをやりませんか」というようなことを町長と話をしました。「是非やろう」ということで、3年前から集落ごとの調査をやりました。レーダーチャートにまとめるんですね。1集落1個のレーダーチャートで、集落の人口、高齢化率、病院までの距離、学校までの距離、子どもの数、町営住宅の数と、客観データはこっち側です。これはGISとか国勢調査から分かります。

集落に入って行って、集落の寄り合いで「生活はどうか、文化は守れていますか、災害対策はできますか、環境は管理できていますか」というのを、大体何ポイントか皆で話し合っ、主観的なポイントを入れてもらっています。これを1つのレーダーチャートにするわけですね。そうすると集落ごとの特徴がすごく見えてきます。集落を廻って来て、これは左よりの集落ですね。

左よりの集落というのはどういう集落か。客観的な条件は恵まれているはずですよ。町営住宅も多い、子どももいる、学校も近い、病院も近い、人口も居る。にもかかわらず、本人達はちょっとダメだと思っている。これはもったいないですね。客観的には恵まれているのに、本人達、ちょっとやる気がないというのはちょっともったいない。じゃあ、どういうことをやるべきなのかというのが見えてきますね。福井という集落、西もそうですが、集落ごとにこうやって見えてくるんですね。

逆もありますね。逆バージョンは、右よりの集落ですね。豊田なんていう集落は右より集落です。この集落は客観的にはほとんど恵まれてないですね、学校が近いだけという集落ですね。他は何も恵まれていない。ところが本人達はものすごくやる気があります、まだまだいけると。数値的に言えば20世

帯以下で 65 歳以下人口が 50%以上の集落ですから、限界集落と呼ばれるかもしれません。ところが全然限界じゃないですね。本人達、まだまだやる気がありますから、こういう集落は限界集落とは呼ばれない。これは限界集落という定義をした大野さんという大学教授も言っていることです。

限界集落の定義は、本当は 2 つあるんですね。数値的なデータで、半分以上が高齢者になったら限界集落というのは 1 つの指標。けどもう 1 個は、自分達の方で自分達の集落の維持管理ができないというふうに諦めていること。ところが、この主観的なことは、集落を聞いて廻らなければいけないから、なかなかデータが集められないので、大学の先生とか研究所の人がもう数値的に集落データから「限界集落 200 箇所」とか出しちゃうわけですね。でも 200 箇所のうちに本人達のやる気がものすごく高い集落というのもしっかりあって、こういう集落は他の集落とやり方を変えていかなきゃいけないだろうということ、海士町では一個一個、集落ごとの特徴を得た上で「今後、どういう取組をしますか。それはどういうところと一緒に協力をしてやっていきますか」ということを話し合っていくということ。ちょっと丁寧にやっていくようなことをやりました。

14 集落ありますから、全集落をチェックした後で、具体的話し合いをやるための人材育成をやりましょうということで、総務省のお金をいただいて集落支援員という仕組みをつくりました。6 名の集落支援員とうちのスタッフ 1 人で合計 7 名の集落支援員が海士町の中で活動することになりました。これは総務省の事業ですね。人件費と活動費が出ます。

集落支援員でも、これまで、今までそんなことをやったことのない人達がここに来ますので、集落支援員ってどういうふうにやるのという研修をやらなきゃいけないということで、1 週間研修をやりました。その研修の時に「役場の各課の職員、若手の職員も出して下さい」と町長に頼んで出てきてもらいました。そうでないと集落支援員が集落に入って、いろんな課題を見つけて役場に帰ってきたのに、誰に相談をすればいいかわからないので、その関係性を作っておくことが大事なのではないかなという気がしています。だから、若手の職員と集落支援員 6 人とで研修をやりました。集落支援員は公募です。島の中の人 4 人、外から来た人が 2 人来てくれました。15~16 人の応募があったんですけども、6 人採用したんですね。

この応募書類の中に、さっきの 46 歳、元ヤンキーの中村さんの書類が紛れ込んでいたんですよ。「間違いじゃないですか」と電話をしたら、「俺はやるんだ」と。「何であなたが集落支援員をやるんですか」と言ったら、あの人は父親から引き継いだ下水道の会社を経営しているんですよ。向こうは合併浄化槽ですので、3 ヶ月ごとに下水道をチェックしに行かなきゃいけない。まわる度に、ここ 20 年、集落の力がどんどん弱っているのをもう目の当たりにしてきたんですね。でも、それは俺は関係ねえと思ってみたいんですが、あの 2 年間の総合計画づくりにずっと参加している間に、I ターンの人意識の高さ、皆がものすごい勉強をすること、そういうのにちょっとずつ、ちょっとずつ触発されてきて、「何で島の外から来たよそ者のやつらがこんなに島のことを考えていて、島に住んでいる俺らが全然島のことを考えてへんというのは、これはまずいんじゃないか」という気持ちになってきたそうです。その時に集落支援員の募集が来たので、「俺はこれをやる」ということで、下水道の会社は誰かに任せておいて、俺はこっちをやるわと言って応募をしてくれてくれたそうです。これは嬉しかったですね。「中村さん、是非一緒にやりましょう」と言って入ってきてもらって、皆と一緒に研修を受けてもらいました。

さっきお話をしたようなことですね、日本全国が人口の高齢化率が 22%に入る 15 年前から島根県は 22%に入りました。さらに高齢化率 22%、15 年前に海士町は入っていますから、この最先端の海士町で、もし集落支援のモデルをつくる

ことができれば、15 年後に島根県全体がそれを真似するし、さらにその 15 年後に日本全体がそれを

真似することになると。今、集落を支援しようと思っているこの7人は、最先端のところの地域に入っていくことになるので心してやって下さいと。ここから誰もやったことのないモデルを打ち立てて下さいという話をしました。僕らもそれを応援しますと。

それで集落支援員には写真の撮り方、動画の撮り方、文章の書き方、名刺を作ったり、あとは人の話の引き出し方ですね、ファシリテーション、合意形成、こういうのをずっと学んでもらいました。

これでうちのスタッフ1人と6人の集落支援員が誕生しました。このチームをきっちり作って、それぞれが2つの集落ずつに入って、こと細かに話を聞いて対策を皆と一緒に考えていく。それで集落支援員が何かをやっているわけじゃない、集落にいる人達自身がアクションを起こさなきゃ集落は変わりませんよということと一緒に話し合っていくということですね。

ちなみにこれは中村さんですね。皆が集合写真を撮る時は帽子を取りなさいと言っても言うことを聞かない人ですね。「俺はこの格好でいくんだ」みたいな感じの人ですが、こんな人も含めて集落に入っていて、じっくり話を聞きますね。

皆、地べたに座っています。東北・北海道でも似ているかもしれませんね。杖をつかずに歩ける人は2人しかいないという集落がありますからね。皆、もう地べたに座りながら話をしていかなきゃいけない。もうお墓を整理して平場に下りて行きましたというところもいっぱいあります。

こういうところでじっくり話を聞いていくと、どこが今住んでいるところでどこが住んでいないかと分かります。さらに誰が住んでいるかが分かります。何歳かが分かります。ということは、10年、20年、30年経ったら、そこがどうなっていくかということも分かります。

明るい赤で書いてあるところが、今人が住んでいるところ、これ以外のちょっと暗い色とか青色は全部空き家です。この集落の2011年の現状を集落支援員が調べました。10年度、どうなるかも分かります。20年経つとどうなるか、30年経つとどうなるかは、もう分かるんですね。2041年にはここしか住んでないです。この状態で集落を閉じたいというのであれば美しく閉じていきましょう。その場合であれば、この集落で培われてきた文化や芸能や伝統、能・歌舞伎、こういうのをちゃんとビデオでアーカイブ化して、ここに集落があったという記録を残したまま美しく閉める、村納めをしていくと。ただ、やっぱりそれは嫌だというのであれば、この2011年のまだ住んでいる人がいっぱいいる段階で我々は何をしていくか、これを考えましょう。「我々は活性化しましょうと言いに来たわけじゃない。どっちでもいいんです、皆さんが決めて下さい」ということを集落支援員は話しに行きます。

集落によっては、大学の先生が来て「活性化、活性化」と言ってるさいと、行政の人も活性化ばかり言うと、もう疲れたという集落も現実にあります。そういう集落の人達と話をする時に、我々は活性化をここに勧めにきたんじゃない。客観的に考えましょうよというところからスタートしたいなと常々思っています。

最後、残りで少しお話をしておきたいのは、この集落支援員自体を、総務省の金なんていらぬぞというふうに言えるかどうかですね。自立させることです。

我々も設計事務所を創る時に独立しました。青色申告を今でもやっています。個人事業主ですね。ちゃんと自分達で自立して生きていくということをモットーにしていますので、集落支援員にも皆さんに自立してもらいました。税務署に行って開業届をしてもらって、ちゃんと青色申告をするということにして、集落支援員が、早めにお給料はもういらぬと、税金をいらぬと言うために、実はこの調査をしながらずっと起業の種を探していたんですね。

見つかりました。これは海士町独自だと思いますね。全国でまだ1回もやっていないと思います。このあたりも1つのモデルになるかもしれないなと思っていますが。

とにかく家々の中にいらなくなって使わない物というのがいっぱいあるんですね。おばあちゃんの家、1部屋ないし2部屋は20年くらい前にもらったコップのセットとかお茶碗セットとか、そういうのがいっぱい置いてあるんですよ。ヤカンとかストーブとか。こういうのをもう使ってない。「そういうのを全部引き取って掃除をしていきましょうか」と言ったら、「やってくれ」と言われる場合が多いんですね。あと廃屋になったところが、もう倒れるかもしれないからって撤去をして下さいと言ったら、実はその撤去費用の3分の1近くぐらいは中にある物を出す費用なんです。これをうちの集落支援員が先に入ったら、3分の1引きますから工務店としても嬉しいわけですね、撤去する時の費用が浮きます。だから工務店に撤去の依頼があったら、まず集落支援員のチームに連絡をしてもらって、1週間待ってくれば僕らがそれを取りに行きますと言って、このいらなくなった古道具を引き取ります。この引き取りを始めました。

あと集落支援員は視察にまわりました。古物商の免許も取ってもらいました、全員に。修理の講習会もやりました。こういう古い物をおしゃれに売っているお店というのをずっと見てもらって、彼らで古道具&カフェというお店を創ってもらうことにしました。今、集めてきたものを全部保育園の跡地にストックして、洗って、これを綺麗にレイアウトしてディスプレイして、皆が買いに来たくなるようなお店を創っています。古道具&カフェってオープンしました。

1ヶ月の売上が20万円でした。20万円の売上ということは、これイコール利益が20万円ということですね。無料でもらってきていますから。20万円あったら何人くらいの人が暮らせるかということですね。1軒家を借りて5千円くらいです。そこに4人くらい住めますから、1人3千円くらいあればもう家賃は足りちゃう。「5万円ぐらいずつあれば1ヶ月暮らせるんじゃない？」ということで、実は集落支援員がこれで4人暮らせるかもしれないなんていう計算を今やっているところですね。

Iターンがいたり、いっぱいこういう足りないものってありますから、皆が買いに来てくれるんですね。この古道具屋さん、今はかなりの人に来て、どんどん買っていってくれます。当然、在庫が無くなります。在庫が無くなったら仕入れにまわればいいわけですね、集落をまわって、それでおばあちゃんの話聞いて、「腰が痛い」「大変ですね、じゃあ買い物支援をしますか。ちなみにこの部屋の物ももらっていいですか。ありがとうございます。じゃあもらっていきます」と言って貰って帰ってきたらいいと。

だから、まだ千世帯ぐらいありますからね、いっぱい引き取れる場所があるということで、これからずっとこれで集落を支援しながら自分達が自立していくという事ができないかなと。「もう集落支援員の総務省のお金はいいません」ということが言えたらいいよねみたいなことを今、話をしているところなんです。

最後、御紹介をしておくのは海士人というコミュニティトラベルガイドというのを作ったんですね。これはアマゾンでも800円で売っています。海士町の人を紹介するガイドブックというのを作ったんですね。ガイドブックというと名所旧跡とかおいしい食べ物って必ず出てくるのですが、このガイドブックではそれを紹介しないと、むしろ海士町にいる個性的な人ばかり紹介する。読めばきっと会いに行きたくなるというガイドブックがあつていいんじゃないかと。僕らは海士町の人達とかなり仲良くなりましたから、海士町の面白い個性的な人を紹介しよう。その人がたまたまこういう名所旧跡を紹介するとか、ここで働いていたというような紹介の仕方ができないかなということで、今、これは英治出版という出版社から出ていますね。

だから海士町、由緒正しき、あります。隠岐神社、後鳥羽上皇が流されたって。でも隠岐神社を紹介するんじゃないんですね、この宮司の村尾さんという人を紹介すると。この村尾さんがどう面白い人な

のかというのを紹介して、たまたまこの人が神社の宮司だったよという感じにしていくのはどうかとか。民宿もいいのがあります。但馬屋という民宿があります。でも但馬屋を紹介するのではなくて、その但馬屋に丁稚奉公で入っちゃった、これ、10年くらい経ちますけれど、東京の一橋大学という大学を卒業してここに「修行させて下さい」って入った宮崎君という青年がいます。彼はナマコが大好きですね。今、干しナマコを作って中国に輸出しているんですけども、そんなことをやっている宮崎君、「何でわざわざこんな海士町なんて離島まで来て、民宿に丁稚奉公しているの？」って、彼を紹介することで但馬屋という民宿を間接的に紹介するということですね。

こんなことをやっています。梅干しじゃないですね、おばちゃん。あとハーブティーを紹介するんじゃないです、授産施設の障害者の方々。それから島のお母さん、あるいはスナックの名物ママ達を紹介するという。あるいは古道具屋を紹介するんじゃなくてさっきの集落支援員達を紹介するというような人を紹介するガイドブックをつくらうというのがここでの基本的な考え方です。

ということで、125名が登場するようなガイドブックを作ったというのが海士町で関わらせていただいた仕事です。

最後、もうこれは皆さん、行政関係の方々にお話しするまでもないと思います。これまでは住民の人達が矢印分の税金を納めて、行政はその税金分だけ公共的な事業をやって、公益的なメリットが住民に還元されるということでした。

が、これからは当然これが小さくなっていくわけですから、同じだけの公益的なメリットを担保しようと思えば住民側も税金以外の形でこれを支えねばならない。この支えるところをどうデザインするか、このモチベーションをどうマネジメントするかがすごい大事になってくる時代がこれから来るだろうと思います。

かつて道普請と言われましたね、江戸時代、皆で道を普請して造ってきました。同じように、これからも皆で道を造っていく。しかし、単なる道造りだったり維持管理だったり、アドプト制度って掃除をして下さいでは3年で飽きますね。「何で私ら、こんな行政の代わりに掃除をしているんだろう」みたいな話になります。自分達がやりたいと思っていることをここでやればやるほど町のためになっているという、そのメリットをどういうふうに組み合わせるかと考えていくか。皆が言ったからやるんだというモチベーションをどうマネジメントしていくのかの部分の部分をきっちりデザインしないと、長く続くようなまちづくり、あるいはコミュニティデザインというのは実現しないんじゃないかなと思います。

何かきっかけがあれば、必ず住民参加型で、そしてコミュニティづくりというのをさせていただきたいなと思います。それがデザインであっても計画づくりであってもイベントであってもいいと思いますね。どんなことがあっても住民が参加する。そして既にあるコミュニティがパワーアップするきっかけをこの中でどう創るか。あるいはパワーアップするだけじゃなくて仲間を増やすようなきっかけをどう創るか。2年、3年やる間の中で、今まで誰も知り合いじゃなかった人達がこういう小さなコミュニティを創ることになる。何か、こんなきっかけを創ることになれば、それはもちろん計画づくりも大切です、報告書ができることも大事ですが、そのプロセスを通じて住民のある種の塊、つながりを創っていくことになるんじゃないかなと思います。

時間ですがちょっとだけ御紹介をさせて下さい。さっき紹介した小田川さん、ヴィトンのバック以外に興味のないという30代の女性ですが、彼女は総合計画が出来上がった直後に乳がんということが分かったんですね。放射線治療と薬で今は治っています。ところが彼女、やっぱり手術とかをやったりしている間、かなり落ち込んだそうです。「なぜ自分はこんなことになったのか。もう生きていくのが嫌になる」と。その時に、彼女を励ましたのがひとチームというさっきのあのチームなんですね。後で

語ってくれました。「あのひとチームの人達がいろいろと相談に乗ってくれたり励ましてくれたから、もう1回やろうかなと思えた」と言っていました。

中村さん、元ヤンキーも、「小田川、お前がやるって言ったやつだろう。何お前がさぼっているんだ」みたいなことを言って励ましていたそうですね。

そういう形であの人達が一緒になってプロジェクトを進めると、そこで何か打ち込めることがあったから自分はまあやっていこうというふうに思えたという話を後でしてくれました。

僕はそういうお話を聞く時に、この仕事をやっていて良かったかなと思いますね。人と人のつながりを創る、それで100万人以上の方が鬱で3万人の人が自殺、あるいは孤立死が3万人と言われていますね。東北で起きた震災の3倍の人達が、毎年つながりのない中で命を絶っているという状態は、やっぱりこれは尋常な国の形じゃないと思います。この中でいろんな手立てを創って、いろんなきっかけを創って、つながりを1つでも増やしていくということができれば、我々もそこにお手伝いをしたいなと思います。

すいません、早口でしたけれども、以上で僕の話提供は終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。